

## 高村薫さん、デビュー作を紙上で語る (三十六回生 林みどりさん)

### 編集部

昨年の会誌十五号で、高村薫さんがその前年の十二月十七日に関西大学サシオAVホールで講演された。「若者の自立と共生をめざす」を紹介させて頂きました。(二十回生 浅野倉平氏が聴講され、会誌で報告して頂きました)

高村さんはその後もますます活躍され、昨年は平成2年発表のデビュー作『黄金を抱いて翔べ』が映画化され、公開されました。同年の日本推理サスペンス大賞受賞作で、文庫も含めて累計約84万部のロングセラーです。

この作品のあらすじ

大阪市内にある大手銀行の地下金庫から6人の男たちが金塊を強奪しようとするストーリーには、パブルを謳歌する浮かれた時代への反骨心が込められている。

この作品の映画化で、昨年、産経新聞のインタビューに次のように答えられました。

「バブル期にはお札があふれていたといわれるが、実際に机の上の札束を見た人はどれだけの人が。一方、今は不況といわれているが、札束が突然なくなっただけでもない。両方、実感がありません。虚無感という点で、バブル期と現在は似ているかも」。22年前とは時代背景がすっかり変わったのに、再び注目される理由をこう分析した。

デビュー後、作品は次々とヒット。小説を書く原動力をたずねると、次のように話した。

「幼い頃、豆腐屋さんがリヤカーをひいて売りに来ていました。冬の寒い日も冷たい水に手を入れて豆腐を扱っていたその手は、ひどいあかぎれでした。働く人の手や姿をずっと観察していましたね。」

「観察してきたものを表現する手段として、30代で小説と出会ったのです。」

『黄金を抱いて翔べ』の主人公、幸田は倉庫の作業員で、金塊強奪計画を主導する友人の北川はトラック運転手。子供の頃から研ぎ澄ませてきた観察力が鋭い

描写力につながり、22年が過ぎても色あせない魅力をもった登場人物を造形した。デビュー以来、この捜索スタイルは不変だという。(以上、インタビュー記事よりの抜粋)

次に紹介させていただくのは、高村薫さんが何かの本に書かれた文章の一部を、ある方がコピーして送って下さったものの転載です。

本のコピーの下には頁数と一緒にⅦ章とあり、ツバキ、スマレ、バラといった花の名ごとに600字程度の文章に分かれています。千里山に移られる前に住んでおられた東住吉を舞台に『ツバキ』、千里山に移られて『スマレ』と続きます。そこで、その『ツバキ』を紹介させて頂きます。

## スマレ

小学校に上がる前に、わたくしの家族は千里山とい

いま、それらの花の色と姿をひとまとめにして思い浮かべると、何となく時代の古さを感じる。現在では、一般の庭ではアネモネやガーベラやエニシダはほとんど見られない。

わたくしが遊んだのは花で埋まったその庭ではなく、敷地のすぐ外に広がる竹藪の山の方だった。奥へ分け入るにつれて藪は深くなり、日差しは翳り、土も下草も湿って冷たくなる。春先に地主がタケノコ掘りに入るほかは、誰も足を踏み入れる者はない。小学校の六年間、学校にいた時間とピアノを弾いていた時間を除けば、わたくしはずっとその山の中をひとり歩き回って過ごした。

これといって、何をしたという覚えはない。山のあちこちにひそかな窪みや穴を見つけては自分一人の秘密の場所にしていただけのことだったと思う。そうして歩き回っていたとき、たびたび見たのがスマレだった。

当時、千里丘陵には自然の草花が豊富に残っていたが、なぜかスマレだけは少なかった。仄暗い藪の奥へ入ると、うずたかく積もった枯れ葉の間から細い緑の葉が覗き、そこから十センチほどの細い茎が立ってお

うところに引越した。阪神間では芦屋につぐ高級住宅地で、どの家も庭木の生い茂った広い敷地を持ち、サクラの大木がいたるところに緑のアーチを作っていた。ただし、まだ若くて貧しかったわたくしの親が貯金をはたいて買ったのは、千里山の端も端、隣の市との境界にある竹藪の山のそばである。

親は、竹を切り払っただけの広い土地の片隅に、オモチャのような小さな家を建てた。父が会社に行っている間、晴耕雨読を地で行く母は、近くの農家から耕耘機を借り、残った土地全部を耕して畝を作り、そこにありとあらゆる花を植えた。東住吉の路地から思えば、一面に咲き乱れる花も空も家も、めまいがするほどの眩しい明るさだった。

オニゲシ、鉄砲ユリ、スイトピー、グラジオラス、アネモネ、コスモス、マーガレット、マリーゴールド、サルビア、花菱草、ガーベラ、パンジー、チューリップ、フリージア、アイリス、アザミ、かすみ草、矢車草、水仙。

花の咲く木では、バラ、山吹、サルスベリ、雪柳、ウメ、モモ、小手毬、ライラック、エニシダ、ツツジ、フジ、サクラ。

り、その先に、紫の花が斜め下から上を仰ぐように小さな口を開けている。

スマレは日当たりを好む花だから、それが咲いているところには、必ず木漏れ日が差していた。物音ひとつしない藪には山鳩の声だけがコダマし、わたくしはそれを聞きながら、柔らかいスポットライトを浴びて暗い舞台から一っぽつんと立ちあがっているスマレを眺めた。

学校は地獄。勉強は不毛。ピアノは苦痛。友だちなし。希望なし。やりたいことなし。ひとり深い藪の中でスマレの紫に見入って、何を考えたのかは覚えていない。

今もスマレは好きである。園芸種はいろいろ揃っているが、野山に自生している素朴なのがいい。

つい先日、近所の道路でアスファルトの割れ目から一本生えているスマレを見た。昔わたくしが遊んだ竹藪の山は、大阪万博のあった年にいっせいに削り取られて宅地に変った。その真ん中に新御堂筋の幹線道路が走り、北大阪急行の電車が通った。アスファルトのスマレは、二十数年前までその辺りに生えていたスマレの末裔だろうと思う。